

Japan Geoscience Union Meeting 2011

(May 22-27 2011 at Makuhari, Chiba, Japan)

©2011. Japan Geoscience Union. All Rights Reserved.



GHE024-06

会場:301A

時間:5月22日 15:30-15:45

都城秋穂と地質学の長期研究計画

Akiho Miyashiro and his long term blueprint for promoting geological sciences.

宮下 敦^{1*}, 林 衛², 熊澤 峰夫³

Atsushi MIYASHITA^{1*}, Mamoru HAYASHI², Mineo KUMAZAWA³

¹ 成蹊高, ² 富山大, ³ 名古屋大

¹Seikei High School, ²Toyama Univ., ³Nagoya Univ.

第二次世界大戦敗戦後、故・都城秋穂氏は、研究の国際化についての先見性をもって、今日の日本の地球科学の発展のために大きな役割を果たした。特に、1960年代に都城が中心となって構想された地質学の長期計画と、計画の具現化のための固体地球科学研究所構想は、戦後日本地質学の歴史として記録するに値する。また、この計画が、その後の日本の地球科学の発展にどのような影響を与えたかは、科学社会学上の問題として重要である。

1953年以降、日本学術会議は、分野を代表する各研究連絡委員会に対して、科学技術研究の長期的な方向性について提言を求めた。日本地質学会では、都城を座長として1963年長期計画委員会を設置し、広い分野の研究者の討議をへて、1965年共同利用研究所計画も含めた提言を公表した(都城, 1965)。これと平行して、日本学術会議では、共同研究利用機関としての固体地球科学研究所の設立を政府に勧告した(日本学術会議, 1965)。

この際、都城氏は、1965年9月から15回にわたって「地球科学の歴史と現状」(都城, 1965-1966)を公表した。これは、長期計画の立案にあたって地球科学の歴史的発展をレビューし、次世代をデザインする資料をまとめたものである。この論説は、地球科学の研究者に自分達の分野のあり方を見直す契機を与えただけでなく、地球科学以外の多くの人々にも強い印象を与えた。この調査検討が、長期計画委員会の報告に色濃く反映したものと考えられる。

日本学術会議の地質学研究連絡委員会は、その後、久野久を委員長とする固体地球科学研究所小委員会を組織して設立計画を検討した。示された概算要求書は、最終的には13部門、研究者数159名となる大組織で、研究内容の詳細から研究所建屋の概要や予算案までを含む具体的なものであった(渡辺 1969)。この研究所設立は、さまざまな原因により実現しなかったが、この計画の存在自体は、その後の日本の地球科学の飛躍的な進展に大きな寄与をすることになる。

都城秋穂, (1965), 地質雑, 71, 83 - 91.

都城秋穂, (1965-66), 地球科学の歴史と現状, 自然, (地質学の巨人, 都城秋穂の生涯, 第二巻, 2009, 東信堂, 376p 所収).

日本学術会議, (1965), 6-45, 130 - 135.

渡辺武男, (1969), 地球科学, 23, 224 ? 226.

キーワード: 都城秋穂, 地質学長期計画, 固体地球科学研究所, 地球科学現代史

Keywords: Akiho Miyashiro, Long Term Blueprint, Solid Geoscience Laboratory, Contemporary History of Earth Science